

桜蔭俳話会 六月句会(第三〇六回) 桜蔭会館

平成二十四年六月二十四日(日)

【秀句鑑賞】

父の日のワインは赤に江戸切子 貞勝

色んな句会に顔を出していると、「父の日」にワインを斡旋した句によく出会う。また、周知のようにワインには白、赤、ロゼがある。ワインを注いだときにその色が透けて見える容器として最良のものはガラス製のグラスである。表面に種々の模様を彫りこんだカットグラスであれば尚更に効果的であるが、単にカットグラスとしたのでは平凡である。そこで、俳人は古くから薩摩切子や江戸切子という言葉をよく使用する。

俳句の良否は畢竟すれば、季語とこれに配合した事象との相加作用または相乗作用によって醸し出される情趣に共感できるかどうかにある。更に言えばその事象を表すために選択された言葉の組み合わせとその配列の妙味にあるものと言えるから、上記のように各要素を手堅く組み合わせた掲句に賛同者が多いのは頷ける。経験知が増えることは望ましいことであるが、これが素直な鑑賞の邪魔となるのかも知れない。

【秀句鑑賞】

解体のひびき終はるや蟻の列 ツル子

長年月の風雪に耐えた古民家の解体現場に作者は出会った。解体された廃材がそのまま廃棄処分されるのか、あるいは何処かに移築のために運搬されるのか知らないが、一連の解体作業が終わり、もろもろの騒音や振動が消えた後、作者の眼は更地となった地面に注がれる。そこには、民家の床下や礎石の周りに巣穴を張り巡らせていた蟻、あるいは廃材に巣食っていたかも知れない蟻がぞろぞろと現れている。蟻たちは、新しき安住の地を求め、列をなして移動を始めている。

経済的合理性のもとに人間の判断によっていとも容易く生命を絶たれる民家と、それに翻弄される蟻の運命が比喩的に活写されている。中七の「や」は、人間界の営みと自然界の営みとの間の断絶をくつきり浮き立たせている。まさに、切れ字として効果的に機能している。

【秀句鑑賞】

肩凝りの湿布にほへり梅雨の入 秀一

梅雨入り後の湿度の高い時期には、嗅覚を司る鼻の粘膜は程よい湿潤状態に保たれている。そのため、匂いに鋭敏になる。この点で梅雨入りと匂いを配合した掲句は理に適っている。ただ、匂いと梅雨入りを単に絡めただけでは、普通の俳句に終わってしまうところであるが、掲句の巧みさは、匂いの発生原として湿布を特定し、かつ、湿布の張られている身体の部位を特定したことにある。肩凝りなのは作者なのか作者と対面している他者なのかは知らないが、作者の鼻先に近い肩に湿布が張られているという事実を提示することによって、この時期の嗅覚の在り様を活写している。

【秀句鑑賞】

筋通す生き方かたし江戸菖蒲 明美

人は長く生きていくと様々な厄介な出来事に遭遇し、これを取り切るために心ならずも妥協を強いられてし

まうことがある。それでも、己が己であることを忘れてはならず、根源的な部分では妥協せずに生きてゆきたいものである。この句はいわゆる境涯俳句と言ってもよいものであるが、下五に「江戸菖蒲」と置くことによって、単なる境涯俳句に終わっていない。江戸菖蒲がどのような菖蒲であるかは知らないが、「江戸」と言い切ることによって希望や救いを感じる。

#### 【秀句鑑賞】

鎮魂めき浜昼顔の咲きにけり

友子

東北大震災の被災地を訪れて、ある浜辺を散策したときに着想した句なのであろう。潮風に静かに揺れる浜昼顔に「鎮魂」を感じ取ったのは良い。しかし、完成句として顕れた「鎮魂めき」との控えめな表現は、「鎮魂の」と断定するのが良い。おそらく作者は、「鎮魂の」と言い切ることは、自分の得た印象や感動を詠み手に対して強要することになるから、慎むべきことではないかと、考えているのかもしれない。しかし、作者が断定的に表していないこと、作者が確信をもって言い切れないことに対して、読み手の共感を期待するのは無理なのである。人間の生き方として本来持つべき矜持と、文学的効果を訴求するときに使用される表現手法との乖離は、あっても良いのではないか。

#### 【秀句鑑賞】

白バイのつらなる基地や夏薊

明美

白バイ隊の単なる駐屯基地ではなく、おそらく軍隊の駐屯基地の光景であろう。米軍の駐留基地、あるいは米軍と自衛隊の共用基地を、デモ隊が取り囲んでいる。警備に出動した白バイが基地周辺の要所要所に配置されている。これからも続く厳しい基地闘争の行く末を暗示するように夏薊が強い風に煽られている。

#### 【秀句鑑賞】

山寺の泉こんこん永久の音

溪水

泉に対して「こんこん」の修辞は常套的であるが、賛同者は、泉を視覚ではなく、聴覚で捉えたところに着目したのであろうか。「永久の音」に悠久の歴史を重ねる山寺の奥深さと、平和な世界が永久に続くように祈る作者の姿が重なる。

#### 【秀句鑑賞】

虫干や市井に馴染む逃亡者

明美

この逃亡者は、最近の耳目を集めた例ではオウム真理教の指名手配犯であろうか。地域住民の結束が緩められた都会では、逃亡者は何食わぬ顔をして、一市民を装って易々と市民生活に溶け込んでいられる。そもそも逃亡者に内的動因があったのか、あるいは外的動因の偶然の積み重ねによるものか知らないが、その逃亡者はあぶり出されるように隠れ場から弾き出され、司直の手に落ちたのである。逃亡者を虫干のターゲットたる虫であるかのように捉えたのが面白い。その意味では、「虫干」の季語が効いている。

#### 【秀句鑑賞】

### 【秀句鑑賞】

語呂のよき車ナンバー棕櫚の花 秀一

俳句は、俳諧と言われていた時代、そして正岡子規によって連句の立句から独立して「俳句」と呼ばれるようになってからも実に多くの年月が経ち、多くの俳人によって多くの事物が題材に選ばれ、多様に詠まれている。そのため、17音字からなる短詩形の宿命として、「類句類想は避けられない」、「類句類想を恐れていては俳句は作れない」とする論者がいる。

しかし、人生の貴重な時間を俳句に真剣に費やす立場からすれば、このような悟りきった逃げの論理に安易に賛同することはできない。どこかで見たような俳句を読むために句会に来るのではない。取り上げる題材、その題材の処理の仕方などにおいて常に新しい視点を持つよう努力するべきである。

この点で掲句はまさに現代を生きている者の非凡な眼による俳句である。芭蕉の時代には自動車はなかったから、芭蕉全句集にはこのような句は搭載されていない。しかし、今、芭蕉がいれば、このような句を詠んだかも知れない。「車ナンバー」ということによつて、カーポートに駐車している自動車の姿が見えて来る。棕櫚の花との幹旋が絶妙である。

### 【秀句鑑賞】

捌く手のたしかや店の初鯉 ツル子

一般に初鯉の句は食べたときの句やそれを盛る器の句が多いが、掲句は初鯉を料理するときを詠んでいる。着眼点は良いが、この句の惜しいところは、「店の」という措辞を置いたため、捌き手が魚屋や料理屋のプロであることを連想させてしまうところである。板場の職人ならば、商売物を扱う手さばきが確かなのは当然だからである。当たり前のことをそのまま報告しても良い句にはならない。

事実としては、小料理屋の板場の風景なのであろうが、例えば、「店」の代わりに「吾子」（あこ）と置いてみれば、面白い句になる。料理もろくに習わぬうちに嫁いだ娘が、今は立派に鯉を捌いている感激がそこに見てとれるからである。これは吟行句にも共通することであるが、現場はあくまでも句の題材を拾うところに過ぎず、拾った題材を文芸的許容範囲において自由に遊ばせて別の世界にジャンプさせることが必要なのである。

### 【秀句鑑賞】

手書きなき郵便ばかり梅雨長し 秀一

ワープロ文字は官公署や会社などの公用文書では致し方ないが、私信では手書き文字が好きである。以前、巻紙に毛筆文字の手紙を頂戴したことがあったが、そのとき感激は忘れられない。そうは言っても、評者自身は生来の悪筆故、送信者となる場合は、本文をワープロで作成した後、受信者と自分の名を申し訳程度に手書きするだけであるが。ワープロ文字の郵便ばかり受け取る作者の気持ちと、季語の「梅雨長し」がよく響いている。

### 【秀句鑑賞】

羅や認知の友と茂吉展 幸

歌人の斎藤茂吉は精神科医でもあり、斎藤脳病院を開いていた。近頃認知症の出かかった友人と茂吉展に赴

いたとのこと。友人の症状が重くならないように願う作者の気持ちは、当日選んだ「羅」（うすもの）に託されている。

【秀句鑑賞】

言ひ直すラジオニュースや明易し 秀一

これも現代を詠んだ句である。評者も時折、NHKのラジオ深夜便に眠れない耳を傾ける。明け方、4時頃から一時間置きにニュースが流れる。同じニュース項目を読み上げるので、読み違えはほとんど起こらないが、初回では言い直しも時にはある。アナウンサーは事前にニュース草稿に何度も目を通すのであろうが、あの定評のあるNHKアナウンサーが、言い間違えに気づいて言い直す様には、微苦笑を誘われる。NHKではなく、他の民放のアナウンサーかも知れないが、NHKであって欲しい。

【秀句鑑賞】

色こき木生きているよと茄子の花 真二

枯死を危ぶまれていた木が、生きる力を取り戻したのである。下五の季語「茄子の花」を置くことによって生命感が溢れた句になっている。

【秀句鑑賞】

満山の落葉松若葉抜けにけり ヤエ子

「満山」を「抜けにけり」と言い切ることによって、落葉松の若葉に覆われた山々を縦走するとき、作者の五体を包み、作者の胸に入ってくる空気の清々しさがよく感じ取れる。山行を重ねた作者ならではの自然な一句である。